

2020. 12. 13. アドヴェント第3主日礼拝式説教

聖書：マタイによる福音書1章18-25節

『夢に現れた天使』

アドヴェントの第3主日を迎えました。今日の聖書箇所はもう何度となく、読んでこられた箇所であろうと思います。話の内容もすでによくご存じのことと思います。だからこそ、今日また虚心に、あらためて聖書の語りかけに耳を傾けたいと思います。

「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」。イエス・キリストは聖霊によって身ごもったことがここにはっきりと記されています。わたしたちが毎週告白する使徒信条中の「主は聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ」はこの聖書箇所から告白されたものです。聖霊によってとは、神の働きによってということであり、イエス・キリストの誕生は、人間の業によるものではなく、神の業によるものである、ということです。

しかし 18 節の文章を読むと、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった、とあるのですがヨセフにとって明らかになったのは「マリアが身ごもっている」、ということで、彼には「聖霊によって」ということは何も知らされていなかったのではないのでしょうか。だからこそ彼は、マリアとひそかに別れようと決心するのです。結婚前にマリアが自分のあずかり知らぬ仕方でも身ごもった。当時のユダヤでは婚約は法律的には結婚と同じで、こうした場合、マリアは石打の刑によって罰せられる。ヨセフとしてはそれは避けたい。それでひそかに、ということになるのです。

ただ、縁を切ろうと決心した、とあるのですが、決心というよりも思った、望んだ、と訳してよいところで、事実彼の心は揺れていた。割り切ることのできない思いがあった、ということです。

そのようなヨセフに、「主の天使が夢に現れて」語りかけるのです。マタイによる福音書ではこのあとの2章では四度も夢で天使が現れたり、お告げがあったりするのです。夢が神からの語りかけの場になっているのです。

ヨセフは人としての正しさでマリアと離縁しようとした。しかし、聖霊はヨ

セフの考え、思いとはまったく違うことを命じたのです。ヨセフは自分の正しさ、自分の考えを持っていた人です。しかしそれがすべてだとは思っていませんでした。迷いや揺れがあったということです。自分の正しさ一つを握りしめているというのではなく、わからない自分も自分の中にいることを感じていたのかもしれない。自分の正しさを疑っていないのなら、彼はそれを実行し、夢も見なかったのかもしれない。見ても夢の中の語りかけを聞き流したのかもしれない。

夢に現れた天使は「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と語ります。ヨセフはこの時初めて、マリアの胎の子が聖霊によって宿ったのだ、ということを知るのである。聖霊による子ども。驚き以外の何ものでもない出来事です。天使は、恐れず妻マリアを迎え入れなさい、ということです。離縁する、それがヨセフの出していた判断でした。しかし天使の言葉は全く違うことをヨセフに求めている。天使の言葉を聞いてヨセフは苦しんだと思います。この言葉を聞くことは具体的な態度として、自分の子どもではないマリアの胎の子を自分の子として受け入れていくことであり、聖霊によって宿ったという前代未聞のわけのわからないことを受けとめてこの子の父親になっていくこと引き受けていくことだからです。

「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」子どもに名前を付けることは親にゆだねられた大事なことです。ヨセフはそれすらできず、どんな思いでこの天使の言葉を聞いたでしょう。天使は、驚くべき言葉を語ります。この子は自分の民を罪から救う。イエスとは「神は救い」という意味の言葉です。神は救済者だ、それはユダヤ人なら誰でもわかっていることです。しかし、この子が、人々を救うということです。しかもそれは罪からの救いだということです。ヨセフの頭は完全に混乱状態になったのではないのでしょうか。罪から救う、そんなことができるのか。しかもそれは生まれてくるイエスによってだという。

ヨセフは自分の運命を過酷なものだと思ったのかもしれない。平凡な幸せを願って、一人の少女と婚約した、というだけなのに、なぜこんな過酷な現実に直面しなければならないのか、と神を恨んだとしてもおかしくはない。

22節と23節の言葉は、福音書の著者マタイが書き記した言葉です。イエス・キリストの誕生は、神が預言者を通して旧約において語られていたことの

実現だ、というのです。救い主の誕生預言です。しかしヨセフ自身はこの言葉は聞いていない。聞こえてきたのは、夢の中で語られた天使の言葉だけです。

自分にとって都合のいい言葉であれば、外からの言葉も聞くことはそんな大変なことではない。自分の意見を補強し、自分の利益になるような言葉ならたやすく聞くことはできる。そういう言葉ばかり神から求めている人は少くない。しかし、今ヨセフが聞いている天使の言葉は、自分の意見とは正反対、しかもその言葉を聞くことは、自分が思っている正しさを放棄し、自分が変わっていかなくてはならないようなことなのです。

「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた」。ヨセフは天使の言葉に聞き、天使の命じた言葉の通りに従ったのです。

なぜヨセフが天使の言葉を信じたのか。そして従ったのか。もちろん説明はできません。ただヨセフはこの子は聖霊によって、神の働きかけによって生まれる子なのだ、神の子なのだ、ということを知ったのです。信じるという世界に足を踏み入れたのです。神の主導に委ねたのです。神が救い主なる御子をこの世界に与えたもうた、すなわちクリスマスの福音を彼は最初に信じたのです。

生まれてくる子はイエスと名付けられる。神救い給う、神が人間の罪を救うのです。マタイはその子が旧約において「インマヌエル」と呼ばれることが預言されていたと言います。神は我々とともにおられる。人間の罪が救われることと、インマヌエルとが深く結びついている。もっと言えば、罪が救われるということはインマヌエル抜きにはありえないことだ、ということです。

人間の罪を負うことも、人間に代わってその罪の罰を受けることも、そして十字架の死を死なれることも、神が独り子が我々とともにおられるからこそ開かれた道です。どんな時も、共にいることをやめない、という神の意思、御子の意思があつてのインマヌエルです。

ヨセフはもちろん、十字架も復活も知る由もない。わからないことだらけではある。けれども、ヨセフは自分たちに与えられようとしている子どもが聖霊による、神による子どもであることを信じて、その子を自分たちの子どもとし

て受け入れて歩みだした。ヨセフは、マリアと二人、インマヌエルを経験していくことになる。それは、世界中の誰も経験することのなかった救い主の父親としてインマヌエルを経験するという恵みへと彼は導かれたのです。

わたしたちはヨセフではない。マリアでもない。しかしこの二人と共通する大事なことがある。それは、クリスマスの扉は聖霊によって宿った独り子、神がこの世界に罪の救い主をお与えになったということを知り、受け入れるところで、インマヌエルということがわたしたちに経験されていくということです。夢の中で主の天使はヨセフに、「恐れず妻マリアを迎え入れなさい」と語りました。ヨセフの中にいろいろな恐れがあったということでしょう。わたしたちも本当のところさまざまな恐れ、不安を抱え込みながら生きています。しかし、恐れず神の与え給う救い主を信じ受け入れなさい、と天使は語る。そこからインマヌエルの世界をわたしたちは経験していくことになるのです。